

Title	第35回岐阜外科集談会
Author(s)	
Citation	日本外科宝函 (1965), 34(4): 1108-1110
Issue Date	1965-07-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/206499">http://hdl.handle.net/2433/206499</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

めた。

術前術後の神経学的検査からも、頭蓋内に脳脊髄液圧亢進を起させると思われる障害を認めず、術後は軽度の鬱血乳頭のみを残して頭部鬱血症は速やかに消失した。

文献上で、内頸静脈を切断した場合の脳脊髄液圧の変化についての報告と比較し、簡単な考察を加えた。

### 11) 頭蓋骨奇形を伴った V. Reckling-hansen 氏病の3例

岐阜大第2外科

山村 喬・星野睦夫・松岡敏彦

症例1: 2才5ヵ月♂。主訴: 左側頭部無痛性腫

脹。全身色素母斑に加えて、腫脹部の中央に3×4cmの腫瘤触知し、その直上に1×2cmの骨欠損あり。又 Sattelgrube の変形を認めた。

症例Ⅱ: 39才♀。主訴に後頭部及右頸部の無痛性腫脹。全身色素母斑。右耳介下部より頸部に至る手掌大腫瘤あり。後頭部に不規則な12.5×10.7cmの骨欠損あり。組織学的には Neurofibrosarkom であつた。

症例Ⅲ: 20才♀。主訴: 左頭頂側頭後頭部の無痛性腫脹。同時に3×3cmの骨欠損あり。骨欠損の周囲に数コの腫瘤を認めた。

上記3例とも腫脹部に一致して象皮様皮膚増殖を認めた。

## 第35回岐阜外科集談会

日時 昭和40年3月17日午後5時30分

場所 岐阜医大C講堂

### 1) 種々の奇形を伴った膀胱外反症の1例

岐阜医大第1外科

渡 辺 祥

患者、生後1日の新生児。主訴、下腹部の異常。昭和39年8月23日満期安産、体重3200g下腹部に上縁は臍輪に接し、下縁は外陰部に移行する5.5×3.0cmの外反膀胱粘膜を認める。外陰部は一見女性様で陰裂上部に横に並んだ2個の小孔があり尿を漏出する如く見られて、湿潤、また下部に1個の小孔より糞便を排出する。フローセン全麻の下に粘膜外縁を剝離し正中線上にて縫合、膀胱腔を形成する。術後創面感染し、粘膜部は徐々に膨隆して手拳大となり39病日死亡。剖検・外陰部上方2個の小孔は膣口で中隔陰性中隔二重子宮である。下腹部膨隆部は完全前額隔壁膀胱の後部盲端部で拡張した右尿管が流入し右腎膿症を形成、その前部が完全膀胱外反症を来し左尿管は外反粘膜内に閉口していた。その他尿道無形成恥骨離開、総腸間膜症、胸椎破裂、右耳介奇形を伴った。

### 2) 興味ある尿石症の症例

岐阜市民病院泌尿器科

尾 関 信 彦

#### 1) 15才少女に発生した大きな膀胱結石

剔出結石重量110g、断面な層状構造をなし中心に核となる異物の如きものは見当らない。成分は磷酸塩であつた。

#### 2) 両側尿管末端部結石

23才女子。腹痛及び乏尿を主訴とする。IVPで右腎の排泄みず、左腎は著明水腎症を認める。両尿管末端部に小指豆大結石陰影あり。腹部正中切開にて両側尿管切石術を施行する。術後尿量正常となり、IVPにて両腎機能良好で腎盂、腎杯、尿管の形態正常となる。

#### 3) 両側重複腎盂尿管を伴う馬蹄鉄腎の尿管結石

17才男子で左睾丸部痛を主訴とする。検査の結果上記疾病を発見し、保存的に治療し結石の自然排出を見た。

以上3例につき、その経過及び文献的に観察し種々検討を加えた。

### 3) 副腎性器症状群の1例

岐阜医科大学泌尿器科教室

大 原 子 蔵

患者17才の女、主訴: 男性化、

家族歴: 妹も従姉妹1人に男性化を認める。現病歴: 幼時より外陰部の異常に気付いていたが12才頃より男性化を認め最近この傾向は殊に著明となつた。検査結果では Sex chromatin 陽性、ACTH test 陽性、

Dexamethsone 抑制 test 陽性であり、又外陰部の陰核は巨大である。治療として巨大陰核切除と外陰部の整形をおこない現在岐阜医大第2内科にて副腎皮質ホルモンを投与し治療中である。

#### 4) 骨盤腎の1例

岐阜県立岐阜病院泌尿器科

石山 勝 蔵

36才の女。32才で結婚、25才、28才に正常分娩。20才頃より時々左下腹痛あり。卵巣嚢腫の疑で開腹術を受けた所、性器は正常で、後腹膜腔に腫瘍を認められて、当科に紹介。

逆行性腎盂撮影にて、左腎は腸骨部にあり、経腹膜的に腎摘出術を行つた。腎動脈は、大動脈分岐部附近より、又腎静脈は、左総腸骨静脈に入り、この附近と腎とはかなり広く癒着していた。術後経過良好。

摘出腎は52g、組織学的には著しい慢性腎盂炎と水腎症。

#### 5) 結腸 Hamartom の1例

岐阜大学医学部第1外科学教室

伊東 達 次

6才の男子、1才5ヵ月の時、左鼠径ヘルニアの手術を受けた。家族歴は曾祖父が胃癌が死亡、祖父の姉が胃癌が治療中。

約2年半前より、時々便に血液が混るようになり、その時には腹痛を伴う。悪心嘔吐はない。昨年2月より9月迄、体重は全く増加しなかつた。尚昨年検便により蛭虫卵陽性。

入院時、貧血なく、肺腹打聴診にて異常ない。便の潜血反応は陽性。注腸造影で、S字状結腸に、拇指頭大、移動性のある陰影欠損、及びその根部に示指頭大、円形の陰影欠損を認めた。G. O. F. 全身麻酔下にて開腹。S字状結腸起始部に、拇指頭大、有柄のよく移動するポリープ、及びその根部に無柄の扁平円形のポリープを認め、これらを切除す。組織検査にて、有柄のポリープは Hamartom. 他のポリープは Adenoma であつた。

#### 6) 先天性結腸狭窄症の1例

岐阜医大第2外科

河村 義 博

患者、18才男、家族歴、異常なし。

主訴、腹部疝痛

現病歴、出生直後病名不明の血便が約12時間続き、その後發育不良で4才にて歩行可能となる。幼少時より時々腹部疝痛があつたが医師受診、休校等の程ではなく、最近その程度を増強し某医により巨大結腸症の診断をうけた。食欲、良。便通、略1日1回。

検査所見、注腸線で結腸曲部に約1糎の狭窄あり、その口側で高度の拡大、その肛側は正常、蠕動運動も認めた。

手術的に狭窄部を含めて約20糎切除し端々吻合後注腸線像にて前記拡大像の消失を認め、臨床的にも良好に経過して居る。

組織学的には狭窄部に約0.5糎の範囲に筋線維の乱れを認め、同部に Aganglionosis を認めたが、その口側及び肛門側ではこれ等の異常は認められなかつた。

#### 7) 当教室に於ける胃癌手術の遠隔成績

岐阜医大第2外科

山村 喬・榎本良友

昭和31年9月より昭和38年末までに、入院せる胃癌患者数(再発、再入院を除く)230例について検討した。

消息判明率: 91.3%。胃切除術: 65.8%。

肉眼的根治手術率: 40.6%。

消息判明例についての遠隔成績は、1年以上生存79.3%。2年以上生存42.8%。3年以上生存35.5%。5年以上生存17.8%であつた。

胃切除方法との関係では、普通切除では3年以上生存38.3%。5年以上生存26.5%。全剝では3年以上生存31%。5年以上生存6.7%。全剝では、1年以上生存21.4%であつた。

#### 8) 胃切除後吻合部癌の1例

大垣市民病院外科

森 直之・蜂須賀喜多男・○浅野多一

寺本勉男・松永 吉和・森 直 和

加藤量平

1年9ヵ月以前に十二指腸潰瘍により胃切除を行なつた36才男子。最近胃の具合悪く、食べても物がつかえて入つていかないから精密検査を希望して来院。Barium 透視を行ない、吻合部狭窄著しいので、開腹術を施行したところ、吻合部に一致して癌を認め、腸間膜リンパ腺にも転移あり、残胃全摘術を行ない目下

入院加療中、経過は順調。文献的考察を加えて報告します。

## 9) 乳房 Paget 氏病の1例

岐阜医大第1外科

説 田 周 明

最近我々の教室に於て22才妊婦に見られた非典型的経過を有し病理組織学的に Paget 氏細胞を認めた症例を経験した。

既往歴に妊娠2回ありいずれも流産。月経困難、不順を来した事はない。ホルモン注射を受けた事がある。家族歴に特記すべき事はない。39年5月右乳房内上側に無痛性腫瘤に気付き2ヵ月後右乳頭に湿疹様変化を生じ糜爛を生じ右乳頭は脱落。40年2月3日入院、妊娠2ヵ月の為人工妊娠中絶後 GOF 全麻にて右乳房切断術兼腋窩郭清術を施行。

病理組織学的所見として乳頭部表皮内に Paget 氏細胞が見られた。腫瘤部は Infiltrating duct carcinoma であり一部 schirrhous 様であつた。

## 10) いわゆる顎下腺混合腫瘍の1例

岐阜市民

島田 脩・安江幸洋・加賀谷 穰

いわゆる混合腫瘍は唾液腺中、耳下腺に多くみられるが比較的まれな顎下腺混合腫瘍を経験しましたので報告します。

症例は42才の主婦、2年前より左顎下部の無痛性腫瘍に気付いて居ります。家族歴、既往歴及全身所見に特記すべきものはありません。ツモールは5.5×4.5×3 cm、周囲との癒着なく、組織学的に粘液化の傾向の

強い混合腫瘍でありました。この腫瘍は40才台に好発、女性に多く、耳下腺、顎下腺、舌下腺、では10:2:1の比でみられると云われ、細胞の由来はウイリスの上皮性説が有力であります。時に3.9%~14%に悪性化すると云われ、一般に治療として外科的剔出の外、ラジウム、レントゲン照射が行なわれています。

## 11) 当科外来に於ける頭部外傷例の諸統計

岐阜医大第2外科

坂田一記・上田茂夫・斉藤 晃  
河村義博・山村 喬・榎木良友  
山口三千夫・名和 正・三尾元蔵  
大橋広文・伊藤隆夫・二村敦朗

昭和32年1月から昭和39年12月末日までの8年間に頭部外傷外来患者2,288例を経験した。その間の外来患者総数は151,489人で約15%に相当する。受傷原因からは交通外傷、非交通外傷略々同数であり共に年年増加しつつある。性別では男子が女より2.4倍多く、共に10才台、30才台が多い。外傷の型式はI型、II型が多く、約半数が頭痛、頭重感を訴えていた。髄液圧は測定したものの76%が正常圧を示していた。異常圧を示した24%は何等かの愁訴を訴えていた。治療を行ない、而も効果の判然としている364例については頭痛、頭重を訴えるものが大部分で、その45%に後頭神経圧痛を証明した。かかるものに対しては局麻剤、6%食塩水による遮断術、活性 Vit. B<sub>1</sub> 剤の大量投与を行ない圧痛のないもの、循環動態の異常によると思われるものに対しては星状神経節遮断、循環ホルモン、ニコチン酸製剤等の投与を行ない、何れも良好な結果を得た。